

## 老いをめぐって : コルネーユとボードレールと

著者	伊地智 均
雑誌名	仏語仏文学
巻	27
ページ	1-15
発行年	2000-02-29
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00017349">http://hdl.handle.net/10112/00017349</a>

# 老いをめぐって

—コルネーユとボードレールと—

伊 地 智 均

P. コルネーユの有名な悲喜劇『ル・シッド』(*Le Cid*)のほとんど冒頭で、カスティリアの王ドン・フェルナンが王子の傅(ふ)育官 (*le gouverneur* = 王侯子弟の養育掛) を選ぶ御前会議を開いて、ドン・ディエーグをそれに指名する。自らが指名されると思っていたゴルマス伯爵ドン・ゴメスは、会議終了後、ドン・ディエーグにその憤懣をぶつけ、二人の間に言い争いが生じる。この口論がついに伯爵のドン・ディエーグへの平手打ちとなり、ひいてはドン・ディエーグの息子ロドリグと伯爵の娘シメーナ、この相思相愛の二人の結婚と両家の姻戚関係の樹立に決定的な妨げとなってしまう。以上が『ル・シッド』という芝居の発端の平手打ち事件だが、ここでは、この口論の場とその次の、ドン・ディエーグが老いを嘆く長いモノログの場に焦点をあてて、子細に検討してみよう。そこには、いわゆる老いの問題、さらに17世紀という歴史の枠組み、つまりその政治、社会体制の中で、人事において老いがどのように考課されたのかという問題や、社会の支配階層である封建貴族が独立性、自律性を失い、臣下として王の下に組み込まれていくことに、老いがどのような役割を象徴的に担ったのかという問題に、何らかの示唆を与えてくれるという意味で、はなはだ興味深いものがみられるように思われるからである。

まずテキストをみよう<sup>1)</sup>。

伯爵は本来なら自分がつくはずの地位に、ドン・ディエーグが王の特別の計らい (*la faveur du Roi*) で取り立てられたと不満をいう。それに対して、ドン・ディエーグは王が正しいこと、老いの身ながら昔の奉公 (*les services passés*) にも王が報いてくださることが万人の目に明らか

になったという。以下、要所を抜き出してみよう。

伯爵 いや、どんなに偉大な王でも、我々と変わりのない人間、国王と  
 いても並みの人間同様間違ふことはあるはず。王は、この人選で、  
 今現在の奉仕 (les services présents) には十分に報いられないこと  
 を全宮廷人にはっきりお示しになられたのだ。

ドン・ディエーグ [...] しかし、いやしくも王たる人のご意志は、絶  
 対の力として尊重し、とやかく言わず従わねばならん (on doit ce  
 respect au pouvoir absolu/De n'examiner rien quand un roi l'a  
 voulu.)。 [...]

伯爵はさらに傳育官としての任務に言及して、国の治め方のほかにも、  
 戦いの仕方、武将としての勇気についてなどを自ら範を示し、実地に王子  
 に教えるようにと、もはや老境に入ったドン・ディエーグに次のごとく迫  
 る。

伯爵 つまり、辛苦によく耐え、軍職においては並ぶ者のないように秀  
 でて、幾日も幾晩も馬上で過ごし、休むのも鎧兜の武装のまま、敵の  
 城を攻め落とし、自分の力で戦いの勝利をかちとる。それにはどうす  
 るかをお教える。そのためにはあなたが自ら範を示し、王子の目の  
 前で実地を見せてお教えし、非の打ちどころない武将にお育てするが  
 よい。

老齡のドン・ディエーグにはもはや伯爵のいうような実際に範を示して  
 教える能力はない。彼は辛うじて次のように反論する。

ドン・ディエーグ 自ら範を示すとなれば、はばかりながら、今までの  
 わしの経歴の物語 (l'histoire de ma vie) を王子がお読みになるだ  
 けで十分。なにしろ数々の勇猛果敢な武勲の織りなす絵巻物のような  
 ものだから、王子がそれをごらんになれば諸国の民を屈服させ、要所  
 を攻め、一軍の采配をふり、手柄を立てて名を轟かす術は、おのずか  
 らおわかりになるわけだ。

過去の栄光を振り翳すしかないドン・ディエーグに、伯爵は「生きてい  
 る模範 (les exemples vivants)」の力を対置する。

伯爵 いや、生きた模範にはもっと大きな力があるはず。書物を読むだけでは王子の義務を学ぶには不十分。とどのつまり、あなたの過去の年月 (ce grand nombre d'années) がいったい何だと言われるのか。わしの一日分 (une de mes journées) にも匹敵しえないではないか。なるほどあなたも昔は勇士だった。しかし今は、わしが勇士なのだ (Si vous fûtes vaillant, je le suis aujourd'hui.)。この腕 (ce bras) こそ今は、わが王国のもっとも確かな支え。この剣がひらめけば、グラナダの都も、アンゴラの地もたちまちすくみあがる。わしの名はカスティリア全国を守る砦も同然。わしがいなければ、あなたにしてもいずれは他国の統治に服して、敵を主君と仰ぐようになるかもしれぬ。[...] こんなわしの振舞いをじかに見て、王子も敵に打ち勝つ術を学ばれるだろうに。

こうまでいわれて、ドン・ディエーグはいわずもがなの一言をいってしまう。

ドン・ディエーグ [...] そうとしても今度の人選では、王は我々の間に多少は差をおつけになったのだ。

ここからはや売り言葉に買い言葉となるが、その中でも次のような対話は含蓄する所が深いように思われる。

伯爵 当然わしのもものとなるべきものを、あなたが横取りしたのだ。

ドン・ディエーグ それを得たというのも、わしのほうが当然あなたよりも値打ちがすぐれていたからだ。

伯爵 役目を果すにすぐれたものこそ、まさしくそれにもっともふさわしいもの (Qui peut mieux l'exercer en est bien le plus digne.)。[...] なにせ甲羅を経た古狸の宮仕えゆえ (étant vieux courtisan), 策を弄して手に入れたのだ。[...] いや言葉をかえて、王があなたの年に免じてお情けをかけられたのだと言い直そう (Parlons-en mieux, le Roi fait honneur à votre âge.)。

ここに至って、伯爵は嫉妬まじりの腹立たしさを抑えることができず、いちいち反論するドン・ディエーグの頬について平手打ちをくらわせる。

ドン・ディエーグは剣を手にし、「[...] こんな侮辱を受けたからには、命を取ってもらおう。[...]」と叫ぶがむなしく、伯爵は剣の峰打ちでいともかんたんにドン・ディエーグの剣を叩き落とすや、「そんな弱さで (avec tant de faiblesse) どうする気だ。[...]」王子の教育にはあなたの半生記を読んで聞かせるがよい。[...]」と捨て台詞を残してその場を立ち去ってしまう。

さて、この口論の場（第I幕第3場）のテキストをどう読むかを考えてみよう。ただ、その検討に入る前に次のことを断っておかなくてはならない。すなわち、この作品は劇であり、その性格上テキストは必然的に対話、問答の形をとるが、ここではその問答の劇的対立・矛盾の鋭さがこの作品全体の中でどのような劇的効果をもつか、換言すれば、この口論が劇の中でどのように機能しているかをみることに主眼をおくのではなく、対話を交わすドン・ディエーグと伯爵の二人を、そしてこの二人の主張、意見を相互に互換性、交換性のあるものとしてみようということである。平たくいえば、二人の要素をもつ一つの世界、二人の対立意見を含みもつ一つの社会共同体の形成がここで表現、描写されているとみたい。この時、人事、人選という、いずれの国、いつの世、そしてもっと身近に言えば、どんな社会組織においても、日常普通に行われることの意味がわれわれに非常に鮮明になるのである。われわれは、360年以上も前に創られたフランス悲喜劇作品中の二人の登場人物の言葉のやりとりをみているが、他方、彼らというか、彼らが語る言葉もまたわれわれをみ、われわれを照射し、われわれの人事を凝視しているかのようである。つまり、今のこの時、老い、人事、人選などのテーマがずっしりと重く人間の世界に問題を投げかけるのである。

一つの世界共同体の中で行われる人事は、ここでは二つの選考基準、ダブル・スタンダードをもつと読みとれる。年齢における「老」と「壮」である。ドン・ディエーグはもはや昔の勇者であり、ゴルマス伯は今のそれなのだ。そして王子の傳育官選びでは、昔の勇者も肉体の衰え、力の欠乏という負目もち、過去の名声と王の特別の寵愛に依存しなければなら

い。人物の評価を行うのに必要な基準の一つがここに示されている。「老」、「過去」を多大に考慮するのである。今ここにある人間をいかなるものも介在させず直接に考査するのではなく、その人間にまわりつくもの、その人間の名声、伝説、家格、王から賜る特別の寵愛など、間接的にその人間を取り巻いているものを斟酌して人物評価をするのである。人間を実存的に把握するというより、外見の飾りに目が眩む選考といえる。年功序列主義である。このような形で人選に合格する人物は自ら立つことができなくなる。つまり、多くのしがらみに依存する存在 (le dépendant) となる。このようにして、ドン・ディエーグは、「王の意志は絶対の力として尊重しとやかく言ってはならない」と断言するように、王に依存し、過去の己の武勲に、それが織りなす絵巻物の伝説 (un long tissu de belles actions) に頼るほかない。後に、ゴルマス伯から平手打ちの侮辱を受けた時も、つまるところ、その復讐を息子ロドリグの腕に頼らざるをえない。自立自足の不可能、これが老いの実態である。この老いについては、第I幕第5場の老いを嘆くドン・ディエーグの長い独白を通してもう一度検討するつもりである。

さて、もう一つの基準、それに従えばゴルマス伯が王子の傅育官に選ばれるはずであった基準というのは、あくまでも現在の実力を第一の判断材料とするものである。それは「老」よりは「壮」を重んずる。伯爵はこの口論の最初で、王であっても間違ふことはあるとあって、王の無謬性に疑問を投げかけている。つまり、彼は王の権力を相対的には認めるが絶対的なものとはみない。なぜなら、その権力を支えているのは彼の腕 (ce bras), 彼の剣 (ce fer) なのだから。第II幕第1場で伯爵は、平手打ちの件で王が「大分お腹立ちのようだから、厳しくあなたを責められるだろう」とカスティリアの廷臣ドン・アリアスから聞かされて、「わしの命で済むことなら、王の御意のままになされるがよい」と一応、王の権力の絶対性を認めるかのように返答しながらも、その直後に、「わしの名声を保つためならば、多少王のご意向に反するくらい、大逆の罪でもあるまい。仮に大罪だとしても、わしが現在なしているご奉公はその罪を帳消しにし

て十分おつりが来るはずだ (Et quelque grand qu'il (= ce crime) soit, mes services présents/Pour le faire abolir sont plus que suffisants.)」と大言を吐く。さらに、「わしほどの人間が、わずか一日で滅びるはずはない。王の威勢をふるって、武力でわしを処刑したければするがいい。わしが死なねばならないようでは、全王国も滅びるだろう。[...] わしがいなければ、王笏の力もたちまち王の手許から離れ、地に墜ちるだろうからな。王にとって、わしはかけがえのない男。だから、わしの首が落ちれば王冠も落ちるといふもの ([...] Tout l'Etat périra, s'il faut que je périsse./[...] / (le pouvoir souverain) D'un scéptre qui sans moi tomberait de sa main!/ Il (= le Roi) a trop d'intérêt lui-même en ma personne, / Et ma tête en tombant ferait choir sa couronne.)」とつけ加える。まことに伯爵こそが日々王を王たる者にしてきたのであり、現に今そうしつつあるのである。つまり、伯爵がその表象である封建制 (la féodalité) こそが王によって代表される王制 (la royauté) の生殺与奪の権をにぎっているのである<sup>2)</sup>。まるで封建的諸侯と同じともいえる世界観、観念形態を抱くゴルマス伯は、王制という政治形態やその秩序よりも己の一個の人間としての名誉、矜持を大事なものとする。この限りにおいて全体よりも個を優先させ、何にも従属しない、独立不羈の人物 (l'indépendant) である。王権の下から独立し、自立して生きようとするがゆえに、今ここにある自己の能力を恃む、いわば能力主義を信条とする人である。実力主義、その実力による適材適所主義といえるであろう。それは何にもまして直接性、現在性、現役性を第一義とする。まさに「老」よりは、人生の盛りにある「壮」の志向するところである。いささか、はた迷惑なところもあるこの評価基準に従って人事を行うなら、人物が集う組織 (ここでは王国) には秩序よりは、各人がその能力を競うがゆえの一種のアナルシー (l'anarchie) 状態が醸成、出現するだろう。それは己が才能を誇る人びとが剥き出しの身一つで戦う競争で、名誉を争って死闘が行われるのである。

ドン・ディエグは伯爵の平手打ちをくらった後、第I幕第4場で古い

を嘆いて次のように独白する。

ドン・ディエーグ ああ、激しい怒りよ、ああ、絶望よ、ああ、憎い敵なる老いよ (O rage! ô désespoir! ô vieillesse ennemie!)。こんな恥をかくため今まで生き長らえてきたのか。軍職の苦労を重ねて年老いたのも、あれほど多くの武勲の数かずがたった一日で色褪せるのを見るためだったのか。スペイン全土が敬い讃えたこの腕、何度も王国を救い、幾度となく王座の固めとなったこの腕が、今の争いにはわしを裏切り、何の役にも立ってくれないのか。

老いはまず第一に肉体の衰えからくる。ドン・ディエーグはもはや人生に夢を描くことはできない。かつて自らに味方したが今は敵でもあるこの身体 (le corps [...], ce vieil ennemi-ami)<sup>3)</sup> は、伯爵に平手打ちをくらい、いともかんたんに剣を叩き落とされたあの瞬間から、もはや自己制御の力、自己を支配する力 (du pouvoir sur soi-même) を失ったのである。封建貴族にとってこれほど不名誉なことはない。たとえ王子の傳育官に選ばれるという名誉を与えられても、彼は名誉の失墜に直面する。伯爵は王の傳育官の選に漏れた。ドン・ディエーグは平手打ちという侮辱の恥をすぐことができなかった。二人とも自己の誇り、プライド (l'orgueil) がこれを許さないのである。

ドン・ディエーグ こうなっては昔の名声など思い出すのも辛いこと！ 数かずの日の苦労の結晶もただの一日で消え失せるのだ！ 新たに受けた重い役目がこの身の幸せを奪い去ってしまうとは！ わが名誉があの高みからまっ逆さまに墜ちるとは！ みすみす伯爵にわが誉れのすべてを奪われ、恨みも晴らさず死んでいくのか。それとも恥を忍んで生き長らえるのか。[...] (傳育官という) こうした高いお役目は名誉を失くした男には勤まらぬもの。伯爵よ、貴様の嫉妬まじりの傲慢からあのいまわしい恥辱を受け、王のご任命にもかかわらず、もうわしにはその値打ちがなくなってしまったのだ。おお、わしの剣よ、[...] 今は年老い、凍り果てたこの身体には空しい飾りにすぎぬわが剣よ。[...] 人間の屑、最低のものたるこのわしから離れて、もっと勝れた



手の中に渡り、このわしの仇を討ってくれ。

このようにドン・ディエーグの剣は息子ロドリーグの手に受け継がれ、その彼が父の恥をすすぎ、恋人シメヌの父である伯爵を決闘で殺すことになるのだが、ここでドン・ディエーグは自らのことを封建貴族としては人間の屑 (le dernier des humains) と呼んでいる。このことから、彼は伯爵と同じく、りっぱに封建貴族の心情、エトスの持主であるといって差し支えないであろう。王が彼を傳育官に選んだのは、彼のこの心情の高尚さに加えて、老人としての経験や知に期待してのことだったろうが、予期せぬ決闘の仕儀になるのである。そして、封建貴族はいわば一国一城の主のような者だから、自由に生命をかけて勝敗を決するのである。

決闘についていえば、現実のフランスの国家、リシュリューが政治権力の中枢にいた時代 (1622~43) には、何度も決闘禁止令がでていた。封建貴族階級の力を弱め、政治勢力としての新教徒 (les protestants) を滅ぼし、オーストリア王家を弱体化させることを三つの政治目標においたリシュリューにとって、国家を差し置き、自己の名誉欲に走る封建貴族は有害な存在であった。このように、絶対王制の基盤固めに努める国家という観点からみれば、王国を支えるべき貴重な貴族が決闘で命を落とすことは大きな損失であった。ちょうどこの劇においても王権はまだ弱体で、しっかりと確立していないことは、上述の伯爵の台詞にみたごとくである。ドン・ディエーグと伯爵の二人の登場人物は封建貴族の社会共同体を共に生き、競って名誉、栄光、偉大さを求め合うが、しかしすでに、この共同体の中に亀裂が走っていた。封建貴族は今や国家を支える人柱となるよう求められていた。フランスは封建貴族国家から絶対王制国家への変革期にあったのである<sup>4)</sup>。

P. コルネーユは『『ル・シッド』自作吟味』 (*Examen du Cid*) の中で次のように書いている。

「[...] この王は十分に力強く見えない。このことについては、次の事情を考慮に入れることができる。つまり、ドン・フェルナンはカスティリア初代の王であるということ、彼以前においては、この地はレオン王国の封

臣で、伯爵の称号をもつ領主たちに支配されていたということである。私より前にこの主題を取り扱ったギリエン・デ・カストロは、自国のことだけに、その初代の王の権威がどの程度のものであったかは、私より当然よく知っていたはずである。その彼の作では、この平手打ちが王と国務を司る二人の大臣の面前でなされるのである。しかも伯爵が高慢で挑戦的な言動を示して退出し、一方ドン・ディエーグが嘆息をつきながら引き退るや、この大臣たちはなんと王に伯爵をこれ以上怒らせないようにと忠言するのである。というのも、伯爵には「…」多くの味方があり、「…」その連中はいつなんどき反乱を起こし、モール人と結託するやもしれぬからである。かくして王は事を荒ら立てずにおさめようと決心し、事件の目撃者たる二人の大臣に、このことはだれにも口外しないように申しつけるのである。』<sup>9)</sup>

コルネーユは自作ではるかに王の権威を重くしながらも、当時のフランスの歴史的転換期の二重性をドン・ディエーグと伯爵の二人の口論を通してよく描いているのではないだろうか。肉体の老いによって心身の自律性を喪失したドン・ディエーグは、伯爵の王に対する心情とは微妙に違わずれを表現していて、この彼の姿は、次の世代において、絶対的な権力をもつに至った王に従属し、王の下にヴェルサイユ宮殿に集められた、あの飼い馴らされた廷臣の姿を予見させるのではないだろうか。いずれにしても、彼と伯爵は二人してこの時代に生きた貴族の心情を、その亀裂、ゆがみ、ねじれ、ひずみの様相の下に表現しているといえよう。その際、身体と、ひいては精神の衰えにつながる老いという要素が、『ル・シッド (*Le Cid*)』において演じた役割りは決して看過できるものではないだろう。

ここでボードレールの『悪の華 (*Les Fleurs du Mal*)』の「パリ情景 (*Tableaux parisiens*)」中の一編、「七人の老人 (*Les Sept Vieillards*)」をみてみよう<sup>9)</sup>。ここに唐突にこの詩をもち出すのは、第一に「老人」を表題にし、老いを表出しているからであり、第二には、まったくの偶発の衝突による効果を期待してのことである。コルネーユとボードレールの、

17世紀前半の封建貴族制の残滓がまだ色濃くみられつつも絶対王制へと変わりつつあった時期と、19世紀半ばの資本主義時代の衝突は相互に思いがけない光の照射を浴びせて、一層明確に老いというものの、歴史的変遷を経たのちの全体像、全体的把握に一步でも近づく可能性をもたらすのではないだろうか。

蟻のように人の蝟集する都会、夢幻に満ちた都会、  
そこでは幽霊が真っ昼間、行人の袖引きをする。  
遅しい巨大な都市の動脈の狭い通路を  
縦横に到る所、樹液のように神秘が流れる。

ある朝のこと、そこは悲しげな通りであったが、  
家並が霧に烟って日頃より高く見え、  
さながらに水嵩の増した河の兩岸の堤のふう、  
また、俳優の魂に似た背景というのだろうか、

汚くて黄色の霧が空間をすっかり浸していた時、  
私は主役でも演ずるように神経をこわばらせ、  
すでに疲れはてた自分の魂と議論を重ねながら、  
重々しい砂利馬車が地を揺する場末の町を辿っていた。

突如として、一人の老人が雨もよいのこの空の  
色そっくりの、黄ばんだ襦袢を身にまとい、  
その眼に光る意地悪さがなければ、  
施しものもたっぶり戴けそうな様子で、

私の前に現れ出た。瞳はまるで胆汁にでも  
浸されたよう、そのまなざしは冬の霜を研ぎすまし、  
長い顎鬚は剣のようにこわばって、  
ユダの髯もかくやとばかり突き出し尖っていた。

その腰は曲っているというよりは、二つに折れていた、  
それほどまでに背骨は脚と完全に直角をなしていた、  
手につく杖でできあがる姿はまるで、  
びっこをひく四足獣か、[…]

異様な風体、ぎこちない歩き方であった。  
雪と泥濘の中を足枷を引摺るように進んで行った、  
まるで重たいぼろ靴の底で死者たちを踏んで行くよう、  
この世界に、無関心というよりは敵意を抱きながら。

同じ姿の老人が彼の後に続いた。髯、眼、背中、杖、襷褌も、  
何もかも瓜二つで、同じ地獄から来た百歳の双児の兄弟、  
異様なこの幽霊たちは、足取りも同じく、  
誰も知らない目的へ向かって歩いて行った。

[…]

この不吉な老人は、刻一刻と殖えて来て、  
とうとう私は七人まで、指折り数えてしまった！

[…]

ところで思ってもみ給え、これら七人の醜悪極まる怪物が  
老いぼれはてていたくせに、不滅の相を具えていた！

[…]

物が二重のように見える酔いどれのように苛立って、  
私は自分の家に帰り、戸を閉めた、恐怖に戦き、  
病気になって身は凍え、精神は熱に浮かされ錯乱し、

この神秘とこの不条理に深く傷つけられていた！

[…]

そして私の魂は、帆柱もない古びた運搬船、  
岸も見えぬ魔の海の上で踊りに踊っていたのだ！

この詩の語り手である「私」、つまり詩人ボードレールその人でもある「私」は、19世紀半ばの都市改造工事の煤煙にけぶる廣大無辺なパリ、蟻のように人が蝟集する都会（fourmillante cité）で、七人の怪物のような老人と、現実か夢の中かわからないような出会いをしたのである。あたかもマクベスのように<sup>7)</sup>。七人の老人はともに双児というよりはむしろクローンのごとく同じで、蟻のように個別性が判然としない。これは大都会から直接産出される物、物なのである。詩人はたしかに彼らの肉体的、物質的外見たる髯、眼、背、杖、ぼろ（barbe, oeil, dos, bâton, loques）は正確に描写するが、彼らがなぜ今ここに、このように存在し、なぜ眼の中に悪意（la méchanceté）を抱いているか説明できない<sup>8)</sup>。詩人の魂は理性で把握できないようなパリの広大さに直面して翻弄され、ただ踊る。彼はいら立ち、錯乱し、わが家に帰り、戸を閉めてしまう。神秘と不条理に傷つけられて（Blessé par le mystère et par l'absurdité!）。

これは何を意味しているのか。まず、七人の老人の瓜二つ性であるが、これは彼らに個の区別性、識別性がないことを示す。詩人が出会う周囲の他者には、己を明確に印づける多様な差異性が欠如しているのである。そしてこのことが、観察者である詩人、語り手である「私」自身の唯一性の意識の崩壊を惹き起こす。詩人はこのような都会の住民に、毎日、毎時間、刻一刻とひっきりなしに遭遇し、彼らを凝視せざるをえない。無名の大衆という他者に自らの存在の反映をみて、己の個別性に対する大きな疑問の中に落ちこむ詩人の精神はまさにいら立ち錯乱する。

こうしてボードレールの詩では、いともかんたんに主体は客体と相互に交換し合う。ここでは詩人、詩の語り手、詩の登場人物、読者が相互に代り合い、凝視し合い、そこに都会の場景が重なって一つの多重な芸術的世

界を表出しているといえよう。19世紀ブルジョワジーの老人は、資本主義の生産を担う都市工場で大量に産出される名も無い醜悪な老人なのである。「パリ情景」の中でこの詩の次に配置されている「小さな老婆たち (*Les Petites Vieilles*)」では、女性たちの個別性が、辛うじて女性のある種の側面に注意を向けることによって描かれている。「ある者は、祖国によって不幸に落とされ、ある者は良人によって苦悩をなめた、ある者は子によって胸を刺された聖母となった。」つまり、未婚婦人、妻、母というような側面である。ボードレールの女性に対する同情 (*la sympathie*) のなせる業か<sup>9)</sup>。

ここで次のことを結語としたい。

封建貴族は、絶対王制に徐々に移行しつつあった時期に、国家形成の大義 (*la raison d'Etat*) のもと、王の臣下として組織し直され、その自立性を失っていった。一人ひとり名を名乗り、名誉、プライドのためにおおらかに決闘していたが、次第に大勢の無名の臣下の一員に成り下がったといえよう。老いはこの時一つの決定的な負性をもって封建貴族に襲いかかる。コルネーユの『ル・シッド』では、自分の腕一つで独立していたドン・ディエグが老いを自覚するという場面で、上記のことが象徴的に描かれていると思われる。ボードレールの詩では、次々と立ち現われる老人たちは、無数で無名の大衆の一員でしかない。老いは醜悪な人生の残滓なのだ。

このようにして、老いは文学表現として人間を疎外するもの、物化するもの、あるいは疎外された人間の生を終局的に表現するものであろう。現代のフランスの精神科医クロード・オリヴェンシュタインは、「老いるとは、少しずつ、段階的に、孤独に入ること」という。そして、「群集 (*multitude*) と孤独 (*solitude*) と。[...] 互いに対であり、互いに意味を交換しえる二つの言葉である」とはボードレールの言である<sup>10)</sup>。

(本学教授)

## 注

- 1) 使用テキストは, *Œuvres de P. Corneille*, éd. par M.Ch. Marty-Laveaux (Les Grands Ecrivains de la France), 12 vol, Hachette, 1862-68 である。  
 翻訳は, 岩瀬 孝他訳『コルネイユ名作集』, 白水社, 1975から借用し, さらに山内義雄訳『佛蘭西古典劇集』中のコルネイユ『ル・シッド』, 新潮社, 昭和3年を参考にさせていただいたが, 論旨の都合上若干変えさせていただいた。
- 2) Cf. B. Dort, *Corneille dramaturge*, L'Arche, 1957, pp. 51-4. および, Georges Forestier, *Corneille Le Cid*, Collection Texte et Contextes, Magnard, 1988, p. 66.
- 3) Cf. Claude Olievenstein, *Naissance de la Vieillesse*, Editions Odile Jacob, 1999, p. 13.  
 なお, 鳥取絹子訳『老いのレッスン』, 紀伊国屋書店, 1999, pp. 12-3.
- 4) 拙論, 「*Cinna* における国是 *raison d'Etat* の確立」, *GALLIA X-XI*, pp. 42-60, 大阪大学フランス語フランス文学会, 1971. 参照。
- 5) 岩瀬 孝他訳, 前掲書中の拙訳, pp. 552-3.
- 6) 使用テキストは, Baudelaire, *Les Fleurs du Mal*, Introduction, relevé de variantes et notes par Antoine Adam, Classiques Garnier, 1961 である。  
 翻訳は, 福永武彦編『ボードレール全集 I』, 人文書院, 1963 と, 鈴木信太郎訳『悪の華』, 岩波文庫, 1992, 第35刷から借用させていただいたが, 論旨の都合上若干変えさせていただいた。なお, 京大人文学研究所, 多田道太郎編『悪の花註釈』, 平凡社, 1996, 第3刷を参考にさせていただいた。
- 7)と8) Rosemary Lloyd, 'Hypocrite Brother, Hypocrite Sister: Exchanging Genders in *Les Fleurs du Mal*', *French Studies*, Vol. LIII, No. 2, April, 1999, pp. 167-175. 中の p. 170 と p. 171. なお, この詩の読みについてはこの論文が参考になったことを記しておきたい。
- 9) *Ibid.*, p. 171. なお, A. Adam は前掲書, Baudelaire, *Les Fleurs du Mal* の巻末の注記で, この詩は1859年に発表されたが, すでに1851年8月26日にボードレールが次のように書いていたことを明らかにしている。少し長くなるが引用すると, Le 26 août 1851, il écrivait déjà: 《*Quels moyens pouvais-je efficacement employer pour persuader à un jeune étourdi*

*que l'irrésistible sympathie que j'éprouve pour les vieilles femmes, ces êtres qui ont beaucoup souffert par leurs amants, leurs maris, leurs enfants, et aussi par leurs propres fautes, n'est mêlée d'aucun appétit sexuel?... Si l'idée de la Vertu et de l'Amour universel n'est pas mêlée à tous nos plaisirs, tous nos plaisirs deviendront tortures et remords.》*

- 10) Claude Olievenstein, *op.cit.*, p. 13 および, Baudelaire, *Petits Poèmes en prose* 中の XII. *Les foules* の一節。また, 山村嘉己著『詩人と女性—フランス象徴主義の裏側—』, 関西大学出版部, 平成10年, pp. 47-8. 参照。